

令和 4 年 5 月 6 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2021

課題番号：16K04154

研究課題名（和文）近代日本のハンセン病宗教福祉思想史研究

研究課題名（英文）A Study on the History of Leprosy Religious Welfare Thought in Modern Japan

研究代表者

輪倉 一広（WAKURA, Kazuhiro）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10342122

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：国のハンセン病政策が絶対隔離主義へと転じる1930年代に焦点を当て、4人のキリスト教救療事業家の救療思想をその依って立つ神学的な根拠にまで遡って相関的に意味づけることを目指して取り組んだ。ただ、諸理由から結果的に以下の2人の検討にとどまった。ハンナ・リデルについては、回春病院の未信患者であった青山滋の日記をもとに彼女独自の性分離処遇論について、またコンウォール＝リーについては聖バルナバ・ミッションの患者処遇上の道德方針について、二人が依拠したアングリカニズムとの関係に注目しつつ探り出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、社会事業家の宗教思想の見地から援助者 被援助者の関係のもち方および独自の救済の場ならではの特徴をとらえようというもので、これまでほとんど取り組まれることのなかった新たな領野からの開拓的研究である。

キリスト教に基づく独自の人間観・社会観をとおして援助者と密接につながっていたハンセン病救療活動がどのようなメカニズムで宗教福祉思想となって具体的に展開されていたのかを実証的に明らかにすることで宗教福祉のダイナミズムを客観的にとらえることができたといえる。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the 1930s, when leprosy policy turned to absolute isolation, I tried to imply the practical ideas of the four Christian relief practitioners from theological grounds. However, for various reasons, only the following two people were examined. I investigated about Hannah Liddell based on the diary of Shigeru Aoyama who was the patient in the Kaishun hospital considering the relation to her Anglicanism understanding about Liddell's original sex separation treatment theory. I also explored The Moral Policy of the St. Barnabas Mission, noting her relationship with her understanding of Anglicanism.

研究分野：宗教学、社会福祉学

キーワード：ハンセン病 キリスト教 アングリカニズム ハンナ・リデル コンウォール＝リー 回春病院 草津 聖バルナバ・ミッション 道德

1. 研究開始当初の背景

ハンセン病に関する研究は、1990年以降に、おもに1930年ころから始まる絶対隔離政策に焦点を当てる形でもっぱら国家権力や人権の視点から積極的になされてきた。その一方で、社会問題の解決を「救済」や「援助」ととらえなおして検討する社会事業史研究は、そうした動向に影響されつつも必ずしも呼応することなく過去の救済事業の発掘の一環として進められてきた。しかし、それらの研究は基本的に社会事業家が行った救療活動の実態把握およびその皮相的評価にとどまっていたといえる。俗世から忌避されスティグマに満ちた病気ゆえに必然的に宗教が担うことになるハンセン病救療においても宗教思想的な検討は十分になされないままの傾向が続いてきた。

それに対して、本研究の視点はあくまでも宗教実践の一つとして宗教的な人間観・社会観との関連性をつぶさに考慮して救療実践の思想的メカニズムをとらえ評価する点にある。これまで筆者が取り組んできたカトリック司祭・岩下壮一や日蓮宗僧侶・綱脇龍妙の各実践を対象としたハンセン病思想史研究も同様な見地から進めたものであり、本研究もまたその延長として他のキリスト教救療事業家について検討しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、1930年代におけるハンセン病救療事業家の思想と実践について宗教福祉思想史研究の視座から検討するものである。国のハンセン病政策が絶対隔離主義へと転ずる1930年代に焦点を当て、ハンナ・リデルをはじめとする4人のキリスト教事業家個々の特徴的な救療思想とそこから惹起される救療実践とをその依って立つ神学的な根拠にまでさかのぼって相関的に意味づけるとともに、援助者と患者との援助関係の構造や変容を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

まず、それぞれのハンセン病救療事業家が事業活動を展開した現地に赴き、一次資料の調査・収集に当たる。その収集資料等を基に次の検討作業を行う。事業家が対象者である患者たちとの間で構築した援助関係の構造とその神学的根拠の解明、事業家の求める援助関係に対する受け入れ資質(ワーカビリティ)の解明、事業家に特徴的に見られた救療思想・救療実践がもつ神学的な意味の解明、援助関係と救済の場の変容の解明。

4. 研究成果

研究成果を以下の論文として発表した。

論文「回春病院における性分離処遇をめぐる援助関係のダイナミズムとアングルカニズムの関連性についての研究」『社会事業史研究』No.57、社会事業史学会、53-65頁

私立のハンセン病療養所である回春病院を設立した英国聖公会宣教師ハンナ・リデル(Hannah Riddell)が主張した患者の性分離処遇論は独自のもので、従来のリデル研究でも中核的な問題として検討されてきた。本稿では回春病院の未信患者であった青山滋の1931年の日記をもとにリデルの性分離処遇が患者にもたらした意味を、リデルが影響を受けたと考えられるアングリカンの思想との関連において検討した。

リデルが提示した性分離処遇論は、中世英国の中・上流階級の患者の自律心に期待をもって形成された施設処遇モデルを基に提起された。一方、共同体がつくり出すコモン・センス(common

sense) がアングリカンの人々の「信念」の形成に影響を与るといわれる。リデルは英国中世に遡ってつくられたこの「コモン・センス」に性分離処遇を支持する「理性」的信念を見出し、患者の性分離処遇論を主張したものと理解できる。

論文「草津聖バルナバ・ミッションの救療事業にみる聖公会慈善の道德原理」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』第71輯、87-95頁

コンウォール＝リー(Cornwall Leigh)の救療事業における患者処遇上の道德的方針・思想を、とりわけ日本における従来からの通俗道德と聖公会のキリスト教倫理との相互関係に注目しつつ明らかにした。具体的には、信徒＝患者の主体性・自主性をミッション(伝道)という向社会的な機会を通して存分に発揮させることで患者コミュニティに生気を与え、結果的に他に類を見ないほど患者の社会性において健全さを回復させた点について検討した。

コンウォール＝リーの草津聖バルナバ・ミッションにおける救療実践をその道德原理から評価するなら、積極的・普遍的な公共精神をはぐくむ思想的・宗教的な土壌をもたなかった日本人とは異なり、英国国教会の宣教師であったコンウォール＝リーはアングリカニズムに依拠した「共同体の信仰」を目指して異邦人である草津のハンセン病患者たちを自らの宗教的権威と同ミッションの参加者(患者)たちによる合議との2つの方法を彼女の献身的寛容を基盤にして折衷的に用いることで柔軟に組織化を果たしたとみることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 輪倉一広	4. 巻 57
2. 論文標題 回春病院における性分離処遇をめぐる援助関係のダイナミズムとアングリカニズムの関連性についての研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会事業史研究	6. 最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 輪倉一広	4. 巻 71
2. 論文標題 草津聖バルナバ・ミッションの救療事業にみる聖公会慈善の道德原理	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告	6. 最初と最後の頁 87-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------